

## 八 聞えた振の不徹底

聽聞は眞劍でなくてはならぬ。そして聞いたお謂が、すつくり自分のものにならねばならぬ。煙草の煙を吹きかけられたやうに、煙に巻かれたばかりでは、其處ぎりで本の木阿彌になつて了ふ。御教化のお言が、一々身を切り刻む如く、キビくこたへて來ねば、眞實大事のかゝつた聞き様でない。ヤレ易行だヤレ他力だと云ふと、いかにも容易やうではあるが、本當にこの易行が味はれ、他力が味はれるのは決して容易な事ではない。おいそれと、あんまり上走のした聞きやう解りやうでは、本當に聞いたとも解つたとも云はれぬ。如來の御慈悲が、ぞつこん身に沁み徹りて、差引ならぬ處に至るのである。

家に鼠が澤山ゐて荒れて仕方がない。是非とも其の鼠を捕へねばならぬと愈柵落を仕掛けた。一升柵を膳の上に蓋のやうに置いて中に米を入れ、少しく鼠の這入る様に一隅を開けて置き、鼠が這入ると其の柵が落ちて、鼠が蓋されると云ふ仕掛なのである。此の方法で一晩經つて朝行つてみると、甘く落ちてゐます。中で奴さん頻と騒いでござる。主人は中へ手を入れる譯にも行かず、又其儘にもせられず、兩手に支へてしつかり振つた。上下左右四五回振つて音もしない様になつた。開いて見れば、こは如何に、大きな白鼠目をまはしたのか死んだものか、ぐんにやりして居る。主人は顔色かへて「しまつた、あゝしまつた。白鼠様福の神様、誠に濟みませんことを致しました、何卒蘇生つて下さいまし、只さへ貧乏な此家、福の神様まで酷い目に逢はして、あゝ勿體ない、申譯がない……」頻りに御詫して居る處へ、鼠は目を醒ましたものか、ぐつと頭をもたげた。「オ、御氣が付きましたか、お有難い、早くくお早く御全快あそばす様に……イヤ起きられましたか、しつ

かり遊ばす様に……」下らぬことを並べて居る間に、鼠は身慄して柵を飛び出し、襖を傳つて鴨居に上つた。主人、畏るゝ拜み上ぐれば、こは如何に。今迄白鼠であると思つたのは普通の鼠であつた。「これは怪しい、福の神様が姿をお變へ遊ばした、オヤ〜」と云つて居ると、傍に見てゐた女房、たまりかねてグツとばかりに噴出し、「マアあなたは何を云つてゐられます、その柵では昨夜米の粉を量りましたのに。白鼠と見えましたも道理、柵を振られたから、鼠が粉まみれになつて居たのでせう」と横鎗をつかれて大笑になつたとさ。

私共も此の鼠のやうに、折角の御教化を振り落さねば幸であります。昔は信者が不信者の間にまぎれて、一向に信者の風を見せず極樂に往生したと云ふ。今は不信者が信者の間にまぎれて、一向に信者振を見せかけながら地獄に落ちる者がありはすまいか。蓮如上人は其の籠を水にひて、置けと仰せられる。成程籠を水の中へ浸して置けば、籠が水の中にあると共に、水が籠の中にある。お慈悲の水の中につかつてゐる身だと感ずる時、お慈悲が胸に波々と湛へて下さる。塗物は剥げる、付けたのは落ちる。生地に限る。この生地と一體になつたお慈悲が有難いでないか。